

「山行」(遠く寒山にのぼれば石径斜なり) 杜牧

「山の秋」

AKY訳

秋深き

ひとけなき山のぼりきて

石径いしみちはるかそのさきの

白雲くもの切れ間に人家見ゆ

そぞろあたりを観るほどに

楓の木々に夕陽映ほえ

燃える霜葉もみじは桜はなとも競うか

秋の暮れ

霜に打たれし紅葉は

春の桜はなにも劣らぬものを

「山行」

杜牧

遠く寒山斜石径

白雲生処有人家

停車座愛楓林晚

霜葉紅於二月花

(読下し文)

「山行(さんこう)」

杜牧

遠く寒山に上のぼれば石径斜(ななめ)なり

白雲生ずる処(ところ) 人家有り

車を停(と)どめて坐(ま)そぞろに愛す

楓林(ふうりん)の晩(くれ)

霜葉(そうよう)は 二月の花より紅(くれ)ないなり

「晩秋のさびさびした山を登っていくと、石ころの多いならかな小道が続いている。白雲の湧き上がるあたり、峯の近くに人家が見える。夕日に楓が映えている。車を止めて、ゆっくりあたりの風景を愛でていると、霜にうたれた楓の葉は、春の花よりも紅い。」

中国では、春の盛りの花は、真っ赤な桃の花だとそうです。私たち日本人の感覚だと、春の花といえば、桜です。紅くはないけれど、日本人にとって桜は特別。もつとも、紅葉の季節には、その桜に負けないくらい、紅葉見物に夢中になります。特に京都の紅葉の季節の混雑振りは、春の桜にも見事さも人出もけつしてひけをとりません。京都の紅葉は、関東に比べて少し葉が小さく、葉の数は多いように思います。発色も紅くてきれいです。

しかし、日本人の場合、桜の花より勝るとまでは、いふのは難しいでしょう。「競う」とか、「劣らぬ」で勘弁してもらおうことにしました。

杜牧（八〇三〜八五二）、字は牧之。晩唐を代表する詩人。二十五歳の若さで進士に及第、美貌で連夜妓楼に居続けするなど風流才子の名を残す反面、豪放磊落で、政治・軍事に精通していたともいわれる。杜甫を老杜と呼ぶのに対し、小杜と称される（岩波文庫、「中国名詩選」）。

〔参考〕他の方々の訳詩〕

「霜ニ打タレシ紅キ葉ハ」

松下緑訳

サミシキ山ノ石ノ路

登レバ秋モ極マツテ

白キ雲湧ク峯チカク

忽然トシテ人家アリ

車ヲトメテ暮レナズム

カエデ林ヲ賞デル目ニ

霜ニ打タレシ紅キ葉ハ

春ノ花ニモ勝リケリ

- 山行、山あるき、石径・小石の多い道。
- 寒山、人里離れたひっそりした山。下の降りる季節の山という意味も含まれていると思う。
- 白雲生処有人家、雲がかかっている山の上の方。そこまで上つていったのか、それとも、上を見上げたら、雲の切れ間に人家が見えたのか。
- 車、唐詩画集には、手押し一輪車が描かれている。だとすると険しい上の方までは、上れないのではないか。
- 坐、そぞろに、なんとなく。
- 霜葉、霜に打たれて赤く色づいた葉、ここでは単にもみじとした。
- 二月、陰暦の二月は春の盛り。